

日本の昔話

18

日本放送出版協会

備後の昔話

■ 稲田浩二 監修

■ 稲田和子 ■ 高田雅之 ■ 新宅全美 編

監修者

いな だ こう じ
稲 田 浩 二

1925年岡山市生まれ。広島文理科大学を卒業し、現在、京都女子大学文学部教授。

主著・主論文に『昔話は生きている』『説話文学 必携』（共著）『日本靈異記話型の一考察』『今昔物語集の説話性に関する試論』などがある。

編者

いな だ かづ こ
稲 田 和 子

1932年岡山県に生まれる。1955年頃から昔話の研究に着手。現在山陽学園短期大学講師。著書に『日本昔話百選』（共著）『笑いころげた昔』『くわずにょうぼう』などがある。

たか だ まさ ゆき
高 田 雅 之

1930年岡山県に生まれる。現在、岡山民話の会会員、山陽新聞記者。1964年から77年にかけて備後地方の三原、因島、甲山の各支局に在勤。著書に『瀬戸内の夜明け』1905年広島県甲奴郡上下町に生まれる。14歳で上京し独立する。東京大空襲に会い帰郷し、農業のかたわら1952年から気象観測所、図書館を経営して現在にいたる。

しん たく まさ み
新 宅 全 美

日本の昔話18

<検印廃止>

備後の昔話

定価 1800 円

昭和52年 7 月20日 第1刷発行

監修者 稲 田 浩 二

編 者 稲 田 和 子

高 田 雅 之

新 宅 全 美

発行者 藤 根 井 和 夫

印刷 凸 版 印 刷

製本 石 津 製 本

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1

郵便番号150 振替 東京1-49701

©1977 Koji Inada

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Kazuko Inada Masayuki Takada Masami Shintaku

0339-015018-6023

いのち長きものへの畏敬

稲田 浩二

遠いわれらの祖先から口づたえに伝えられてきた日本昔話の現状は、たとえていえば、目に見えない地下水のようなものです。それは、あわただしい情報と速度に飲みこまれた人々にとっては多分だんの生活には無縁であり、ときおりふとなつかしむ過ぎ去った日々、ふるさとのようなものでありましょう。けれども、その地下水は、いまもつつましく生きている、心ある人々がその氣になつてたずねるならば、やさしくことばをかけ、耳を傾けるならば、意外にみずみずしいことば——昔語りが地上にわき出るものなのです。わたしどもは、ここに一九七〇年代の一つの証言として、日本の各地にわたるこの種の実験をありのままにみなさまにご報告いたしたいと思っています。

昭和の初年、柳田国男が昔話を学問の対象とした当時、すでに昔話は生活の表面から姿をかくしかけていたようです。柳田国男はこれを愛惜し、一日も早い調査をと人々に訴えています。それから半世紀たったいま、昔話はいっそう地表から深くもぐり、代ってブラウン管や活字の「民話」が

人々の目をうばっております。それにいちいち目くじらをたてるというのではありません。新しい皮袋に盛られて、「民話」はどこへ向けていくのか、多少の不安をもって見守りたい、とわたしなどは思っております。ただ、これまでこれほど一律に昔話が扱われたことはなかったので、昔話の世界も年とともに従来なかった変化を蒙るのではないかと思えます。いや多分それはもうある程度まで進行しているにちがいありません。東北に伝承してきたはずの昔話が、ブラウン管や活字をへてこつ然として山陽地方に現われてくるということです。したがって、昔話が村や町、家々に伝わるという土着的・風土的な本質は、よほど注意深く扱わないと裏切られることになります。

「日本の昔話」はこの意味でかたくなに、村々家々に口づたえされてきた昔話に限りて収めることにしました。編集にたずさわる皆さんはいちいち語り手のところにおもむいて、一つ一つの話を聞き出し、録音テープに収め、これをそのまま文字に移すことにしました。それはぶこつだけれど、ありのままの口づたえの姿を最もよくとどめるものだと思うからです。したがってこれは、読者のかたにそれほど口ざわりがよくない食べものかもしれないかもしれません。土から掘り出したままの、いわば料理の素材だからです。ただそれをじっくり噛みしめていただけなら、現代日本のつましい素顔の一つに出会えるはずです。テレビや書物でなめされない、日本人の飾らないものの見方、表現、よろこびとなげき……総じて日本人の人生のありのままがこめられています。

どうしたわけか、これらのことばは、同じ棟の下に住んでいる家族でさえも耳にすることがほと

んじゃないものです。語り手ご自身も多くの人が何十年ぶりに語ったという種類のものです。したがって、大部分の話がたまたまよい聞き手の編集者に出会って、水を得た魚のようにふき出して世に出たものです。いまわたしどもは、これを命長きものへのいとおしみと畏敬の念をもって世にくりたいと思います。これがよい読者をえて、新しい明日をうんでいくかとなれば、語り手とわたしどもの望外の幸せであります。

一九七七年四月

はしき

昔話を求めて新しい土地に入っていく時にはいつでも不安を拭うことができない。年寄たちが未知の人間にはたして心を開いてくれるだろうか。邪魔者扱いされはすまいか。教育委員会や文化財保護委員会を通してお願いしてあるし、昔話を滅亡に任せてはならないという使命感に燃えているものの、絶望的になってしまふことがある。甲奴郡上下町の故秋山テル子さんは、

「初めて来なされた時にゃあ、今に歯ブラシが出るか、ナフタリンが出るか、出しんさったら一つもうて去んでもらおうと思うとった」と笑話にされたが、後には「切っても切れぬ因縁がある仲」といつてくれるようになった。

備後地方では私たちはどこでもあたたかく迎えられた。昔話と限らず、老人の話を聞こうとする者が少くなっているのに違いない。「この山奥まで、こがあな婆あの話の聞きに来られたか」と涙を流しながら昔話を語ってくださった人もある。初対面なのに「泊まって行け」とすすめてくれる家もよくあり、女子大生たちは昔話よりもそのことに感動をおぼえたいらしい。出逢いを大切にした後、のちまで文通を続けている。

けれども昔話が衰亡を続けているのは疑いもない現実で、「もう何年か早う来られたら、誰それさ

んが生きとった。あの人は話し家で、なんぼうでも話を知っとった」「誰だれもまだ中風がついとらなんだ」と残念がる声をあちこちで聞かされた。それでも一九七四年一月から七六年八月までの採訪で二四四人（語り手紹介欄参照）の人たちから昔話を聞くことができたのは幸せとしなければならぬだろう。最後の鉾脈を掘り当てたという気がする。

この人たちにとって昔話とは何だろうか。以前この地方のどの家にも囲炉裏があったように、昔話があったのは当り前のことだった。「そがあなものを何にせられますりゃあ」と、いぶかりながらも、記憶している人は生き生きと楽しみに語ってくださった。憶えていない人には、憶えていそうな人を紹介してもらった。同じ広島県のこととて、原爆を受けた人、原爆で子どもを失った人も多くおられた。戦争その他で恵まれない晩年を送っている人は多かったが、私たちの訪問は語り手がひっそりと死蔵していた昔話に日の目を見せるきっかけになり、この人たちを勇気づける結果になったのは嬉しい。

日本の昔話シリーズに加えていただいたお蔭で、炉端で昔話を聞けなかった若い世代も、語りつがれてきた昔話を、書物という新しいルートで、郷土の言葉で引き継いでいけることになり、深い感謝でいっぱいです。

凡 例

(1) 本集八十四話は一九七四年から三年間の採訪において、語り手より直接テープに収録した話の中から選んだもので、忠実に文字化した。

(2) 題名は一部を語り手がつけたが大部分は編者がつけた。

(3) それぞれの昔話の後に『日本昔話名彙』（柳田国男監修・日本放送協会編、日本放送出版協会刊）の語型を示している。また名彙になくて『日本昔話集成』（関敬吾著、角川書店刊）にある時はその語型を示している。

(4) 話ごとに、語り手の現住所と氏名を記した。

(5) 方言をできるだけ忠実に再現しようとして、特殊な「かなづかい」を採用した。

「を」 旅をする↓ 旅うする あれを↓ ありよう

「に」 仇討ちに行く↓ 仇討ちい行く

「は」 こんどは↓ こんどあ

「……して」 入って↓ 入あて 回して↓ 回あて

目次

いのち長きものへの畏敬	1
はしがき	5
凡例	7
地図	8

昔話

しょうとんどんの鬼退治	19
おがせになっただかい番子	23
味噌と豆腐のけんか	24
兎とひきの餅争い	26
十二支のいわれ	27
たこ、かめ、いわしとひき	29
桃太郎	32

瓜姫とあまんじゃく……………	36
山行き番子の望みごと……………	41
鴻池 こうのいけ の鶴の恩返し……………	44
絵姿女房……………	48
狐女房……………	51
蛇女房……………	53
竜宮女房……………	61
蛇婿入り(1)……………	64
蛇婿入り(2)……………	72
継子の柴拾い……………	76
狐や狸が化ける話……………	80
田の久兵衛……………	82
嘘つき弥次郎……………	86
話三貫目……………	92
縁起直し……………	96
嘘つきの小僧さん……………	98

焼餅和尚	101
和尚さんの誕生餅	103
和尚さんの指合図	106
柚子味噌の親	107
ぼた餅の歌	109
肉付きの面	110
三人兄弟	112
太郎と豆梯子	118
夢見小僧	124
夢の蜂	127
あとかくしの雪	130
三つのかなえごと	132
笠地藏	136
弘法大師と柴栗	138
弘法大師と蛭	139
男花、女子花	140

榴と手拭い	143
天とうさんから縄	145
猫と獵師	148
一つ家の化け物	149
灰屋三五郎 はんや	152
舌切雀	154
燕 つばめ のくれた瓢箪 ひょうたん	157
屁こき爺	159
猿地藏	165
隣家人と私家人	168
水蜘蛛話 みずぐも	169
狐の産	171
狐の祝言	172
熊裂き	175
鼠のお経	176
嫁の屁	178

まのよい獵師	181
傘屋の万平	182
仁王と八王	184
力持ちの助友(1)	188
力持ちの助友(2)	189
広島県の大い話と小まい話	191
頭が池	193
弓の名人	194
横着くらべ	197
馬鹿揃い	198
くせを持つ一家	199
長い名前の子ども	201
亡者になるぞ	204
風呂屋の福助	205
越原左衛門	208
越原一番叟	213

手水 てみづ を回せ……………	215
八間だけののえい……………	218
餅はおおそ……………	219
鶴亀の歌……………	221
盆が先か正月が先か……………	225
半殺し、手打ち……………	227
無筆の手紙……………	229
皿に下肥……………	230
人が消える花……………	232
雀が鳥居を踏み折る話……………	234
借金取りの香奠……………	236
西行法師と女……………	239
長い話のしあいこ……………	242
語り手紹介……………	243
解説……………	249